

鍾彤澐とその著作*

Zhong Tongyun and His Works

高田時雄

前言

鍾彤澐といってもほとんどの人が聞いた事のない名前と思われる。この人物は民國十二年（1923）に敦煌千佛洞を訪れ、紀行と詠草とを残している。周知のように、敦煌千佛洞は一九〇七年に英國のオーレル・スタイン（Sir Aurel Stein）が、翌一九〇八年にはフランスのポール・ペリオ（Paul Pelliot）が藏經洞から大量の古寫本を得て、本國に持ち歸ったことで一躍有名となった。そのため羅振玉らの進言もあり、清國の學部では宣統二年（1910）に至り、藏經洞に残存する古寫本をすべて北京に送らせる措置を取った。もっとも藏經洞の管理に当たっていた道士王圓籙は、それ以前にかなりの數量の寫本を別の場所に隱匿していたらしく、明治四十四年（1911）から四十五年（1912）にかけての冬に日本の第三次大谷隊の吉川小一郎が王道士の手から數百の寫本を購入しているし¹、一九一四年の春、スタインはその第三回探檢の途上再度敦煌に來たり、相當數の寫本を入手している²。また同年の冬、オルデングルグ（С.Ф. Ольденбург）率いるロシアの第二次探檢隊も洞窟の徹底した調査によって少なからざる寫本斷片を手に入れた³。

スタインがすでに報告しているように、一九一四年の時點では肅州や甘州でも寫本を入手することが出來た。したがってこの頃までにはすでに藏經洞から出た古寫本は甘肅一帯に流出していたことが窺える。民國以降に張廣建、許承堯、孔

*小文は日本學術振興會科學研究費（20K00379）による成果の一部である。またほぼ同内容の中國語版が『文獻』雜誌 2023 年 11 月第 6 期に掲載されている（221–229 頁）が、この日本語版には若干の補訂を加えてある。

¹《新西域記》（東京：有光社、1937 年）に編入された吉川の「支那紀行」の該當箇所には王道士との購入交渉について精彩ある記述が見られる。

²Aurel Stein, *Innermost Asia*, Oxford: Clarendon Press, 1928, Vol.1, p.356.

³I.F.Popova, S.F.Oldenburg's Second Russian Turkestan Expedition (1914-1915), in *Russian Expeditions to Central Asia at the Turn of the 20th Century* (SPb: Slavia, 2008), p.167.

憲廷、陳閻といった同地の高級官員たちが多数の敦煌寫本を入手するのは決して困難ではなかったと思われる。しかるに民國時期、その二〇年代、三〇年代の頃の千佛洞の状況を窺い得る文献は極めて少ない⁴。向達の「西征小記」中に、地質學者任美鏐（1913–2008）が民國二二年に敦煌に至り、某處で二百卷ほどの寫經を見たことが紹介されているが⁵、何等記録らしきものは残されていない。この時期の千佛洞に関する文献の數少ない現状に鑑みると、鍾彤濤の著作は非常に貴重なものであると思われる。

一、鍾彤濤の著作

實のことを言えば、筆者がこの人物のことを知ったのは、今年（2023年）の初めに偶々《輪蹄集》という小冊を入手したことによる。これは鍾彤濤の詩集で、その序に「余以民國十二年五月于役安肅六閱月始歸，前後得詩百餘首，二存八，名之曰輪蹄集，所以別於其他諸集也」とあって、この人が民國十二年（1923）に安肅道に出張した際の吟詠を整理して刊行したものであることを知る。また「所以別於其他諸集」とあることで、鍾彤濤にはまた別の詩集のあったことが知られるが、それらは今に傳わらない。

《輪蹄集》は鉛印本で、每半葉十行、行二十三字、全二十五葉からなる。縦26.2センチ、横14センチの縦長の判型で、鮮やかな朱色表紙が附いている（圖一）。版心下部に「和通印刷館排印」とあることから（圖二）、これが蘭州の和通印刷館で刷印出版されたことが分かる⁶。和通印刷館はまた和通印書館とも稱されたらしく、民國四年前後に設立され、同十七年まで存続したとされる⁷。卷首、鍾彤濤の自序に續いて、許承堯（1874–1946）の題詩が見えている⁸。許承堯は民國二年（1913）張廣建の招きにより甘肅に入り、甘肅省政府の祕書長や甘涼道尹などに任じたが、民國十三年に至って職を辭し、北京に去り、嗣いで古里に歸った⁹。甘肅の官場に

⁴例外として1925年に米國の美術史家ウォーナー（Langdon Warner, 1881–1955）に隨行した踏査記録《西行日記》（北京：樸社、1926年）があるが、鍾彤濤よりも數年遅れる。

⁵向達《唐代長安與西域文明》（北京：生活・讀書・新知三聯書店、1957年），頁367。この言及について、筆者は《甘肅藏敦煌文獻》（蘭州：甘肅人民出版社、1999年）に冠せられた施萍婷女士の「概述」によって知った。

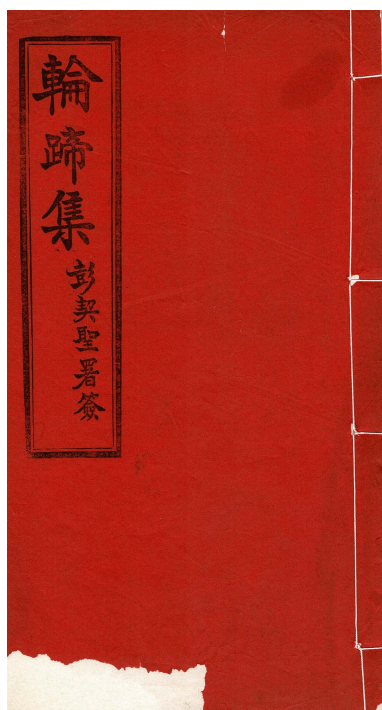
⁶同じく和通印刷館で刷印された劉爾忻《蘭州五泉山修建記》はネット上に書影が流布していて、それを見ると每行二十四字であること以外、書品ほぼ全同である。

⁷《蘭州市志》第50卷《文化事業志》，蘭州大學出版社，2004年，第230頁、「和通印書館」の項。同書に依れば、一貫して國民黨と密接な關係を有したことが窺われるほか、鍾彤濤《輪蹄集》を印刷したことも記録されている。ただ該書に和通印書館とするのは或いは誤りかも知れない。

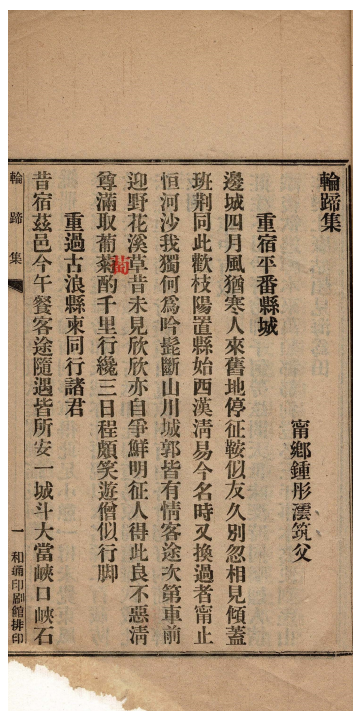
⁸その題詩は「崎嶇三載一相見，掀地詩聲似怒雷，萬里親探天馬窟，九能信是大夫才，酒邊歌哭蒼騰甚，夢外風雲蒼莽來，聚散無端看鬢髮，爲君珍重借深杯。」で、末尾に「歙縣許承堯拜題」とある。

⁹許承堯の生平については多數の論述があるので、ここには一々典據を挙げない。

において、鍾彤灃と許承堯は必ずや接觸があった筈で、許承堯が題詩を寄せているのは異とするに足りない。また《輪蹄集》の題簽下に「彭契聖署簽」とあるのが注意される。この人物は、大東急記念文庫所藏の敦煌遺書《大般涅槃經卷第廿九》に題跋を附し、その文末には「己未五月彭契聖觀于安西縣署」とある¹⁰。己未は1919年、安西縣署で記されているところを見ると、當時彭契聖は安西縣で官途に就いていたものらしい。鍾彤灃が何時、何處で彭契聖と相識ったかは不明だが、この人もまた敦煌遺書に興味を有していたことが分かり、興味が引かれる。



圖一：《輪蹄集》書皮



圖二：《輪蹄集》第一葉

本書の入手後、この人物の他の著作を検索して見ると、《雪泥三記》及び《陸肅武將軍年譜》が存在することを見出した。前者は《中國西北文獻叢書》の第四輯《西北民俗文獻》に收録され、のち《中國少數民族古籍集成》（漢文版）にも收められている¹¹。底本は《輪蹄集》と同じく排印本で、每半葉十行、行二十四字、所用活字は《輪蹄集》と同じように見えるが、和通印刷館の文字が見えないので、同館の印刷か否かは斷言し得ない。但だ恐らくは蘭州の刊行であろう。《雪泥三記》には鍾彤灃の手になる《使肅紀程之一（改定本）》、《蘭州公園記》、《節園記》の三篇を収め、そのうちの第一篇が《輪蹄集》に對應する遊記である。《雪泥三記》に冠

¹⁰ 施萍婷《日本公私收藏敦煌遺書敘錄（三）》，《敦煌研究》1995年第4期，62頁。

¹¹ 《西北民俗文獻》第123冊（蘭州古籍書店、1990）、《中國少數民族古籍集成》（漢文版）第65冊（四川新華出版公司、2002）所收。

する鍾彤澐の序に「民國十二年，余遊敦煌千佛洞，成遊千佛洞日記一篇」と云い、また《使肅紀程之一》の劈頭に「是篇本余民國十二年使肅紀程之二日日記，以紀敦煌千佛洞較詳，朋輩多從借鈔，因錄出別爲一篇，俾欲知千佛洞原委者，咸得先睹爲快云，彤澐自記」と注記するが、《使肅紀程之一》の内容をよく示すものと考えられる。したがって《輪蹄集》と對照させて讀むべきもので、この時期の敦煌千佛洞の情報を伝える重要な文獻であるはずだが、甚だ遺憾なことに《使肅紀程之一》には脱葉があつて¹²、その第四、第五葉が脱落している。底本そのものに缺損があつたらしい¹³。

一方、《陸肅武將軍年譜》も《北京圖書館藏珍本年譜叢刊》に採録されており、翻閱が可能である¹⁴。陸洪濤（1866–1927）は清末から民國にかけての北洋軍閥系の將軍で、一貫して甘肅で軍務に就いていたが、民國十一年（1922）以降、甘肅督軍、甘肅省長に任じた。本書はその年譜である。鍾彤澐は長く陸洪濤の幕下で活動し、その起居を熟知する者としてこの年譜の執筆に當たったものであろう。本書は毎半葉十行、行二十字の立派な木版本で、《輪蹄集》や《雪泥三記》とは自ずとその選を異にしている。卷首に名人の序文等が多數掲げられているが、就中、王樹枏の「肅武將軍陸公家傳」、柯劭忞の「肅武將軍陸公墓誌銘」が注目される。撰者鍾彤澐の序には陸洪濤との關係に言及するが、これに就いては次節で觸れたいと思う。

二、鍾彤澐の閱歷

鍾彤澐の生涯についてはほとんど聞く所がなく、忘れられた存在と云つても差し支えない。鍾彤澐自身は《陸肅武將軍年譜》の序で、「彤澐旅甘近十餘年，公率師援陝，彤澐則任藩署文案，公回軍校場，彤澐則任都督府參事，公移鎮隴東，彤澐則任軍署科長兼祕書，迨公拜督軍兼省長之命，彤澐始任蘭山道尹，繼任軍署高等顧問，知公之爲國宣勞莫彤澐若也。」と述べており、長期間陸洪濤と行動を共にしたことが分かる。自著には凡て「甯鄉鍾彤澐」と稱するから、湖南省甯鄉縣の出身であつたと思われる。また《雪泥三記》には「甯鄉鍾彤澐筑甫著」とあるので、字が筑甫であつたことも知られる。

¹² 《西北民俗文獻》所收本は、第一葉から始まって第三葉までは正しい順序だが、その後に復た第二葉と第一葉をこの順序で誤入してある。その後に有るべき第四、第五葉が脱落するが、第六葉から第十葉までは完存する。したがって換言すれば《西北民俗文獻》所收本の頁數で、その第十一～十四頁が重複していることになる。

¹³ 《中國少數民族古籍集成》は《西北民俗文獻》のテキストを蹈襲したものだが、その亂丁に氣付いたため、二葉分を空白にして（原闕）と注してある。

¹⁴ 《北京圖書館藏珍本年譜叢刊》第188冊（北京圖書館出版社、1999年）所收。

上引の《陸肅武將軍年譜》に云う所と《年譜》に記された陸洪濤の閱歷とを對比させて見てみよう。先ず「公率師援陝」とは、宣統三年（1911）九月、陝西に革命軍が蜂起、西安を陥れた時、陸洪濤は陝甘總督長庚の命を奉じて出陣したが、鍾彤澐はその「藩署文案」であった。恐らく鍾彤澐が蘭州にやって来て未だ時日を経ない頃のことと思われる。次いで「公回軍校場」というのは、翌民國元年（1912）、陸洪濤が「公率師回抵甘肅省城，仍駐校場」であった時に「都督府參事」となったことを指す。その少し前、三月十四日に陝甘總督長庚は印綬を布政使趙惟熙に手交し、自ら辭職したため、袁世凱は趙惟熙をそのまま陝甘總督に命じた。陝甘總督の名稱はまもなく甘肅都督に變更されたが、「都督府參事」というのはそれを指している。また「公移鎮隴東」というのは、陸洪濤が民國二年五月に涼州鎮總兵となったことを指し、この時、鍾彤澐も陸洪濤に隨行して、その「軍署科長兼祕書」となった。その次は、かなり長い年月を経て後のことになるが、民國十一年五月、陸洪濤は甘肅督軍に任じ、その二年後の民國十三年三月には林錫光の免職を承けて甘肅省長となった。「迨公拜督軍兼省長之命」はそのことを云う。それに伴い、鍾彤澐は「軍署高等顧問」の地位を保ったまま、蘭山道尹に就任した¹⁵。以上が、民國十四年八月の時點で、陸洪濤に扈從すること十餘年間の閱歷につき、鍾彤澐自らが回顧したものである。

一方、鍾彤澐自身の述べる閱歷とは別に、僅かながら鍾彤澐の動靜をうかがう資料がなくもない。《東方雜誌》第十五卷第八號に掲載される「職官任免令」に據れば、鍾彤澐は民國七年六月二十七日付で「靈武縣知事」に補されている。靈武縣は寧夏の東南部、黃河の東岸に位置する。古の靈州の所在地という。現在は寧夏回族自治区の靈武市で、銀川市の代管する所となっている。さらに溯って民國二、三年の頃には、現在の天水市の西部に当たる武山縣の知事であったことも知られる¹⁶。また民國八年十二月十四日付で四等嘉禾勳章を授與されている¹⁷。更に民國十年二月十九日の大總統令では鍾彤澐を警務處處長として「存記簡用」すべく發令され¹⁸、同年七月十六日の大總統令では「文官甄用合格簡任職存記」の鍾彤澐を「著分發甘肅交該省長酌量任用此令」とある¹⁹。これらは上記の鍾彤澐自述の閱歷のうち、陸洪濤が甘肅督軍、甘肅省長となる以前に屬し、ややその閱歷の空白を埋める材料とはなる。

¹⁵ 《民國職官年表》（中華書局、1995年）は、その「17. 甘肅省軍政民政司法職官年表」（306-314頁）中で「蘭山道尹」に鍾彤澐の名を挙げないが、補うべきである。

¹⁶ 武山縣誌編委會《武山縣誌》（陝西人民出版社、2002年）、179頁。また同書によれば、鍾彤澐が湖南寧鄉出身の廩生であったことも知られる。この項、學生龔麗坤君の示教による。

¹⁷ 《申報》1919年12月14日（第16820號）。

¹⁸ 《政府公報》第1794號（1921年2月20日）。この項は辻正博氏の情報提供による。

¹⁹ 《申報》1921年7月18日（第17386號）。

陸洪濤は民國十四年一月にはすでに甘肅督軍を辭し「督辦甘肅軍務前後時宜」となっていた。その後、病の冒す所となり、民國十五年には上海に出て治療を圖ったが效なく、天津の舊宅に歸り、民國十六年八月、同地に死去した。これまで頼みとした陸洪濤を失った鍾彤澐が、その後どうなったかはよく分からない。ただ甘肅教育界の重鎮であった慕壽祺（1874-1947）に「送鍾筑甫觀察南旋」と題する楹聯の作があり、「樂山水逍遙，琴聽鐘子期，揮手五弦有遺響；賦田園歸去，詩似陶元亮，怡情三徑未全荒」という²⁰。「南旋」というのは、或いは「昇任」を言うのかも知れないが、「賦田園歸去」の句を勘案すれば、これは鍾彤澐が甘肅を去って湖南寧郷に歸る際に贈ったものである可能性が高い。ただこの楹聯の作成時期が分からないのを遺憾とする。少なくとも陸洪濤を失って後の事であったのは間違いない。ともあれ民國十二年の敦煌行の時點において、鍾彤澐は甘肅の官場で一定の影響力を備えた人物であったと推測されるのである。

三、敦煌千佛洞に関する鍾彤澐の記事

《使肅紀程之一》に據れば、鍾彤澐が千佛洞に遊んだのは、民國十二年の夏八月二十日（農曆では七月初九日）の午後から翌二十一日にかけての二日間であった。同行者は陸階平、彭鍾秀、周鏡珊の三人。これらの人々は恐らく鍾彤澐の同僚乃至友人であったと思われるが、何一つ知る所がない。

ところで現在見ることが出来る《使肅紀程之一》は、上述したとおり、全部で十葉のうち二葉を缺き、殘存するテキストは約四千字である。影印本が通行しているので、ここにそのテキストのすべてを掲げることとはせず、敦煌學に關係する事柄のみを掻い摘まんで幾つか紹介するに止めたい。

鍾彤澐は先ず藏經洞が発見されて以後、スタインやペリオの探險行によって千佛洞が海外に知られるようになった顛末を述べる。千佛洞は海外でこそ有名になったものの、國人にはその名を知るものが却って少なく、洞内所出の藏經を手にした人々もただ敦煌經、敦煌經と云うばかりで、千佛洞そのものの價值には無頓着である。自分は省城に長く居るが、ほとんど遠くに出かけたこともなく、今回の敦煌行は長年の宿願であった。事實、鍾彤澐は徐松の《西域水道記》や羅振玉の《鳴沙石室祕錄》を讀んでおり、單なる一般の愛好家流ではなかったようだ。

初日の八月二十日は敦煌縣城を出發したのがすでに午後二時であったことから、詳しい探查は行わず、千佛洞全體を眺めただけのようで、この日は「湖北の王姓

²⁰陳田貴主編《甘肅對聯集成》（蘭州：敦煌文藝出版社，2015年）、第650頁。この文獻についても學生龔麗坤君の提供になる。

道士」が住持を務める「洞西第一の大寺」に宿った。王姓道士とは言うまでもなく王圓籙のことで、その寺とはいわゆる下寺であったと思われる。

鍾彤滢はその寺の壁に嵌め込まれた唐碑を見た。そこには大中五年五月二十一日の敕文を刻してあったという。とすれば、この碑はいわゆる「洪誓碑」で、もと藏經洞に据えられていたものだが、當時は王圓籙の居住する寺にあったものらしい²¹。また至正八年の莫高窟六字真言碑が横たえられてあるのも見た。これは有名な碑石で、鍾彤滢は以前その拓本を入手したとき、人に碑石の所在を訊ねたことがあったが分からなかったという。

翌二十一日は朝七時から探索を開始した。寺の裏門を出るとすぐの所に大きな石窟があった。これは今日の編號でいう第十六窟で、その甬道の（奥から見て）左側に藏經洞すなわち第十七窟が隠されてあったことは周知の事実である。この時点では第十七窟には何も残っていなかったらしく、何の記事も見えない。その後、東に向かって進み²²、石窟を一つ一つ見て行っただけで、いささか興味も減退しかけたところへ、ちょうど大きな石窟に行き当たったため、そこで一寸休憩することにした。堂の左右に木桶が二つあって、法輪だということであった。そこへ陸君がやって来て云うには、法輪の中には道人（王道士）が藏經洞から出た残片を遺棄してあると聞いたというので、調べてみると塵芥が一杯につまっている。穢いこと限り無いが、地面に出して、我慢しつつ細かに見て行くと、元魏寫經の残字が出てきた。更に仔細に調べると、元魏から五代西夏至至るまでの寫本が全てあるではないか。中でも朱梁の乾化四年（914）十一月二十九日の僧人寫經はもっとも得難いものだ。

文中には有名な「李府君修功德碑」についても、以下のような記述が見える。さらに東へ行った佛堂には塑像が多く見られるが、その中に黒色の石碑一基が非常に目を引いた。黒光りしていて、人の影が映るので、俗に透影碑と呼ばれている。これが《西域水道記》に云う睡佛洞外の「李府君修功德碑」である。碑の両面に文字が刻され、一は「大唐隴西李府君修功德碑記」とあり、一は「唐宗子隴西李氏再修功德記」とある。兩文ともに文字は明瞭に読み取れる。現在の編號でいう第一四八窟である。

更に東行すると、また一洞がある。その洞の外側、木造の檐梁上に次のような文字が書かれてあった。「維大宋乾德八年（970）歲次庚午正月癸卯朔二十六日戊辰，敕推誠奉國保塞功臣歸義軍節度使特進檢校太師兼中書令西平王曹元忠之世創

²¹ この「洪誓碑」は現在は元どおり第十七窟に戻されている。

²² 石窟群は実際にはやや東寄りの北に延びているが、鍾彤滢は「東行」という表現を用いているので、いまそれに従う。

建此窟簷記」。これもよく知られた洞で、今日の編號では第四二七窟に当たる。鍾彤澐の参考書の一に蔣超伯《南湑樸語》があって、彼は時にこの書に言及する。該書には「如來窟巔有大宋乾德八年歸義軍節度使西平王曹元忠建摩崖大字」の記述があって、檐梁上と同じ「曹元忠建」とあるが、そこに見える「如來窟」が果たして何處にあるのか、残念ながら一向に手掛かりがない。

1910年、王道士が壊れた佛像を一箇所に集めて土製の塔を建てた。これを千相塔（千像塔）と稱したが、そこに安肅道廷棟（1866–1918）の撰書に係る「敦煌千佛洞千相塔記」²³の碑があったことを傳えている。この千相塔は1951年に取り毀されたが、碑石そのものは現在敦煌研究院に保存されている。また千相塔から數十歩の所に小屋があり、そこに一老僧のまるで生きているかのような塑像を見て、いたく感心し、「殆昔人特爲余遊記作餘波而設者耶」と記している。

以上が《使肅紀程之一》に書かれた大凡の内容である。文中には他に千佛洞や莫高窟の名稱に關する議論や、石窟開鑿の開始時期についての考證なども含まれるが、すでに二種の影印本が通行しているので、今は繁を避けてそれらには觸れない。

宿に歸って食事を済ませると、机に向かつて「千佛洞古詩」三十九韻を作り、また法輪から得た殘紙斷幅を取り出し、それらをならべ直して一冊とし、歡喜讚歎、五言古詩十八韻を作った。さらに西夏殘字は世に稀なもので、更に五言古詩二十一韻を作った。これらはすべて《輪蹄集》にそれぞれ「千佛洞（在敦煌縣）」、「敦煌石室法輪中拾得元魏隋唐五代西夏寫經殘字，蓋藏經洞初開時住持道人自洞中拾出棄置於此者，距原藏經洞遠隔十餘石室，塵滿其中，故得韜晦至今，余因按時代粘爲一冊，竝作長歌紀之」、「敦煌石室拾得西夏殘字已略見前詩，更作長歌紀之」として收められている。《雪泥三記》と《輪蹄集》は表裏一體のものとして讀むべきものである。詩篇の字句の方が、時としてより眞率な感興を吐露している場合があることを思い、文末に附録としてこの三篇を掲げることにする。ご参考頂ければ幸いである。

小結

民國十二年八月、鍾彤澐は蘭州から長途敦煌に至り千佛洞を踏査して、その紀行を蘭州歸着後、鉛印に附して出版した。すなわち《雪泥三記》及び《輪蹄集》の二書がそれであるが、今日流布すること極めて稀である。この時期に中國國內で敦煌を訪れた記録が極めて少ないことを考えると、これら二書が敦煌學史上の貴

²³鍾彤澐は宣統三年（1911）とするが、宣統二年の誤りである。

重な文獻であることは言うまでもなく。これまでこの二書に言及されたことを聞かないので、不明を省みず些か紹介を試みた次第である。

【附録】

以下に《輪蹄集》より敦煌に關する詩篇三首を選んで、移録しておくことにする。

○千佛洞（在敦煌縣）

高若燕巢懸，密若蜂房起，
戶戶皆玲瓏，門門相邐迤，
大小各殊異，方圓互依倚，
計數得千餘（舊傳共洞千三百餘），佔地幾三里，
尋途拾級升，如入五都市，
一洞復一洞，九曲珠穿蟻，
洞各有佛像，妙盡西來旨，
亦間塑天魔，莊嚴雜奇詭，
或身無半絲，或體盡文綺，
金身或不冠，艷裝或不履，
或妖爲神踏，螳臂苦相抵，
或神啖妖肉，四肢餘一髀，
天女顏如蓮，微笑露玉齒，
大佛高入雲，婆心豎三指，
無壁不畫佛，無佛不寸綯，
百千萬億身，鱗次復櫛比，
時或行洞外，徑仄不容趾，
遊人縱好奇，不敢視如砥，
獨憐山以東，佛洞多摧毀，
石壁豈不堅，剝落亦至此，
再經千百年，頽壞知何似，
滄海果桑田，佛亦長已矣，
峨峨透影碑，建者唐宗子（碑兩面皆刻字，一書大唐隴西李府君修功德碑記，一書唐宗子隴西李氏再修功德記，其碑黑而光，可以鑑影，人呼透影碑），
大中與莫高（唐大中碑係張義潮以瓜沙州歸唐，後寺僧立碑，刻大中五年五月二十一日敕文，莫高窟碑係元至正八年戊子五月十五日功德主速來蠻西甯王暨妃子屈木造像，今臥第一大洞中地下），一臥一立峙，
別有千相碑（碑爲清宣統三年安肅道廷棟撰書，略謂山有舊碣，稱此爲大雲寺，至唐時已歷四百甲

子，時此寺應建於晉時云云。余來遊時已不見此殘碣，以所稱四百甲子考之，儘得八十餘年，約當梁武帝大同時，非晉時也。廷既斷定寺始晉時，不應誤記甲子，恐寫碑時，於甲子若干或有訛脫耳），對立水之涘，

云據殘碣載，寺實晉代始，
經洞鑿何年，聚經藏石裏，
自晉至五代，一一名在紙（余所見洞中藏經，自晉至五代皆有年號暨寫經人姓名），
更有寫本書，墨寶嘆觀止（此等書籍大半爲英法人所得），
有清光緒中，洞門忽自圯，
隱顯各有時，要皆非偶爾，
歐人適來遊，見之色然喜，
倫敦與巴黎，載去數難紀，
我亦有所得，古香芬斐几，
今來訪陳跡，但餘厓石紫，
萬法本皆空，七心究誰是，
語言盡糟粕，文字尤糠粃，
刊石得佛形，傳衣昧佛理，
莫漫誦金經，還當問開士。

○敦煌石室法輪中拾得元魏隋唐五代西夏寫經殘字，蓋藏經洞初開時住持道人自洞中拾出棄置於此者，距原藏經洞遠隔十餘石室，塵滿其中，故得韜晦至今，余因按時代粘爲一冊，竝作長歌紀之。

經洞天既啟，奇寶騰踊出，
不脛走歐美，萬卷一朝失，
洞空無所用，用以藏梁秬，
滄桑例如此，成毀孰能必，
我來廿載後，百覓不獲一，
豈期塵埃中，忽得瓊瑤質，
殷勤事披揀，隻字懼遺佚，
薈萃成巨觀，殘字連城匹，
元魏迄五代，部居別甲乙，
如聚千載人，晤談在一室，
恢奇西夏字，記載鮮稱述，
墨寶忽此逢，勝得波羅蜜，
昔人雖久逝，精神寄楮筆，
後人雖異代，精神通卷帙，

風塵手一編，足遣剛柔日，
放利信多怨，嗜古亦疢疾，
有好卽有累，安用自桎梏，
我佛倘有知，定當笑咍咍。

○敦煌石室拾得西夏殘字已略見前詩，更作長歌紀之。

西夏去已遠，文獻久殘缺，
甯夏彼所都，蕃字無能說，
曩客古涼州，蕃碑矗風雪，
雄圖儘此存，憑弔心淒切，
今來古經洞，塵埃事別決，
墨寶不自閤，入手嘆奇絕，
點畫同楷字，獨以繁複別，
臨池彼何人，落筆整且潔，
別有刊本書，零落餘章節，
同爲脫穎錐，竝在瓊瑤列，
元昊信雄才，旺榮亦人傑（元昊自製蕃書，命野利旺榮演繹之爲十二卷），
蕃書十二卷，藝苑揚鴻烈，
紀事用蕃書，舉國奉圭臬，
蕃語譯孝經，見理獨明決，
歷年二百餘，龍驤非鼠竊，
遼金各有史，獨不與頗頡，
往事付寒煙，但有河聲咽，
蕃書遂絕跡，掃蕩無餘屑，
人藉文字傳，文字竟灰滅，
英雄等螻蟻，霜毫空屈鐵，
感此更高歌，聊用自怡悅。

（作者是京都大學名譽教授）